

# 四年制大学の看護学生における職業準備性

森美春<sup>1</sup> 西山ゆかり<sup>1</sup> 木戸久美子<sup>2</sup>

1 基礎看護学講座 2 附属病院

## 要 旨

四年制大学の看護学生 126 人を対象に、専門職としての職業準備性がどのように整うのか明らかにするために質問紙調査を行った。その結果 8 割は看護職に限定して志向し、その魅力と感じるところは、1) 人々とのふれあい、2) 新しい知識、3) 健康への貢献であった。看護師希望ではない 2 割の学生は学習体験により、専門職としての知識・技術を身につけようとする姿勢を持つことがわかった。従って職業準備性が整ううえで入学後の学習体験の影響が大きいと考える。また『理想の看護師像』の記述からは、1) 専門職者としての特性を理解する段階、2) 看護の専門的知識を習得し看護の方法を理解する段階、3) 理想の看護職としてあるべき自己の姿を明確化する段階の 3 つのプロセスが伺えた。この 3 つの段階を追って学生の職業準備性が整えられると考えるならば、看護の基礎教育の内容が最も身に付きやすい学生時代の 4 年間で看護職への関心、限定性、現実性、主体性をいかに高めるのが重要となる。それには学生が目指す『理想の看護師像』をより具体的に描けるような教育方法や創造的な授業が必要であると考えられる。

キーワード：四年制大学，看護学生，職業選択理由，職業準備性，理想の看護師像

## はじめに

我が国では、大学卒業後の就職率は 55.8%<sup>1)</sup>と低く、定職を持たずにアルバイトなどの一時的な仕事に就く人が 2 万 4777 人 (2004 年) と多い。これには雇用が減少している経済のあり方が大きな原因であるが、そればかりではない。若者が定職を希望しない傾向にあること<sup>2)</sup>の報告がある。いまや若者の就職に対する意識は変化の過程にあるとあってよいだろう。一方看護学生の就職率をみると、89%と高い<sup>3)</sup>。専門性のある大学を選択した以上、この数値は当然といえる。しかし看護学生が看護職に就くことに、現実感を持って捉えるようになるのは、一体いつ頃なのであろうか。また看護を自分の職業として決定する、もっとも大きな理由は何であらうか。そうした看護職への意識のありようは、入学から卒業までの間にどのような変化をみるのであろうか。看護学生はどのような看護師を理想とし、その理想像は何の影響を大きく受けて創られるのであろうか。これらの問に取り組むことは、学生時代に専門職に就くことに対する準備がどのようになされるのか、すなわち看護職への準備性を明らかにすることになる。準備性が明らかになれば、看護職に就くことへの関わりを、よりよく、計画的に行うことができる。本研究では、看護学生のこうした職業準備性を明らかにするために、4 年制大学に在籍する看護学生を対象に質問紙調査を行い、その実態から職業準備性が整えられる過程と教育の方向性を示唆する。

## 研究方法

### 調査対象者および方法

S 国立医科大学医学部看護学科 (現国立大学法人) に在籍する全学生を対象として、研究資料にすることを説明し、調査の主旨に同意の得られた、男女合わせて 260 人に質問紙を配布した。回答の得られた 131 人のうち、有効回答 126 人 (1 年生 25 人、2 年生 17 人、3 年生 41 人、4 年生 35 人、学年不明 8 人) を分析対象とした。

四年制大学を対象としたのは、S 国立医科大学医学部看護学科が県内唯一の 4 年制看護学科として卒業生を輩出し、70 名定員の卒業生の動向は、就職者 87%、進学者 13% (平成 11～15 年) であり、看護大学卒業生の就職率の全国平均とほぼ同率であるからである。

調査期間は平成 15 年 9 月～10 月 であり、1・2 年生は 1 週間の院外・院内見学実習を体験している。3 年生はそれに加えて 2～3 週間の看護学実習を体験している。4 年生は卒業に必要な看護学実習をすべて体験している。

### 調査内容

本研究の質問紙は、看護職への準備性、すなわち看護職への関心、現実性、限定性、主体性をみるために、若林ら<sup>4)</sup>の職業レディネス尺度を参考として、表 1 に示す I 職業選択・決定についての価値観、II 看護職についての関心・認める価値、III 理想の看護師像の 3 部

から構成した。I と II の各項目について、「とても当てはまる」「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 5 段階で回答を求めた。それら 5 段階の選択肢に、5, 4, 3, 2, 1 を得点として与えた。III は自由記載および選択肢からの回答とした。自由記載内容の分析は、KJ 法を用いた。

表 1 質問紙の構成

I 職業選択・決定についての価値観	
A.	職業選択は人生において価値が大きい
B.	職業選択は納得いく判断が大切
C.	職業は運による
D.	就職についての話題が気になる
E.	何をしたいかわからない為自分を見つめ直し決めたい
F.	職業選択について考える暇がない
II 看護職についての関心・認める価値	
＜1. 医療・看護に対する関心＞	
A.	医療関連ニュースを気にしている
B.	看護の話題が気になる
C.	看護職に就くための知識・技術の習得を努力している
D.	看護に対しておもしろさを感じている
E.	看護師希望ではなく、偏差値で本学を選択
F.	看護に関心がなく考えたくない
＜2. 看護職に就くことの現実性＞	
A.	看護職は自分に合っていると思う
B.	看護師になるため足りない知識・技術を学びたい
C.	看護職を自分の主体性で選んだ
D.	看護職を人に勧められ選んだ
E.	このままでなんとなく看護職に就けそうだ
F.	看護職に就くことの現実感がない
＜3. 看護職への限定性＞	
A.	看護師になりたい
B.	保健師、助産師、養護教諭のいずれかになりたい
C.	看護師以外の医療職（医師、薬剤師他）になりたい
D.	医療職以外になりたい
E.	大学生活のなかで決定するつもり
F.	どの職業に就きたいかわからない
＜4. 看護職の選択理由＞	
A.	就職先がある
B.	人とのふれあいを得たい
C.	人々の健康に貢献したい
D.	経済的余裕を得たい
E.	新しい知識を得たい
F.	社会的地位を得たい
III 理想の看護師像	
理想像を自由記載	
理想像に影響を与えた因子を 20 項目から複数回答	

結果と考察

I 職業選択・職業決定について

職業選択・決定についての集計結果を表 2 および図 1 に示した。

表 2 職業選択・決定についての平均得点

項目	A	B	C	D	E	F
得点	4.6	4.5	2.4	3.8	2.8	1.6

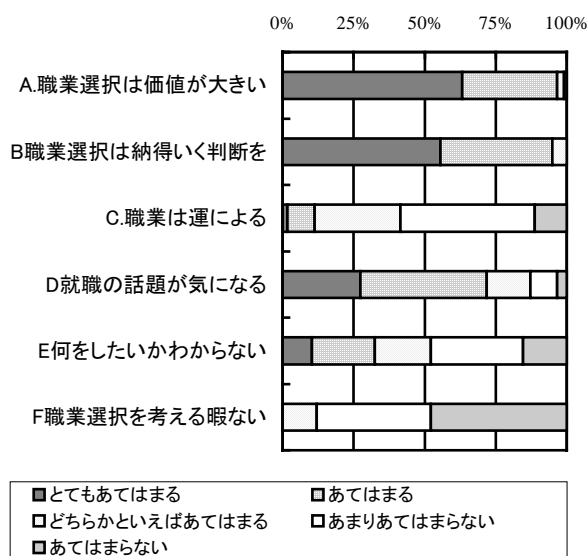


図 1 I 職業選択・決定について(n=117 人)

『A 職業を選択することは、人生において価値の大きいものである』についての得点は 4.6 と高く、「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した人の合計は 97%であった。『B. 職業選択は納得いく判断が大切』についての得点は 4.5 で、「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した人の合計は 95%であった。これらより、95%以上の学生は職業選択を人生での価値が大きいものとして捉え、納得いく判断を重んじていることがわかる。

『C 職業は運による』について「とてもあてはまる」「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた人の合計は（以下「肯定的意見」）42%であり、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と答えた人の合計は（以下「否定的意見」）58%であった。職業を運によると捉える学生は 4 割であったが、これを日本人の国民性<sup>5)</sup>と照らしてみたところ、同様の質問に 4 割の日本人が運と答えていることから、一般的な割合とみなせる。

『D 就職についての話題が気になる』についての得点は 3.8 で、肯定的意見は 87%、否定的意見は 13%である。『E 何をしたいかわからないため自分を見つめ直し決めたい』についての回答は、肯定的意見 52%、否定的意見 48%である。約 5 割が自分を見つめ直したいと考え、何をするか明確に決めているわけではないことになる。『F 職業選択について考える暇がない』については、否定的意見が 87%であった。職業選択は忙しいから考えないという姿勢ではないことを示している。

以上 A~F の結果をまとめると、職業選択・決定を人生において価値の大きいものとして捉え、納得のいく判断をするものであると真摯に捉えている。そして自分が何をしたいかまだ明確でないと回答した学生が約 5 割いることが示された。職業は「運」と回答した人が約 4 割いることは、本調査での看護学生に特有の値ではなく、一般的な値と一致していた。

## II 看護職への関心・認める価値について

〈1 医療・看護に対する関心〉についての集計結果を表 3 および図 2 に示した。

表 3 医療・看護に対する関心についての平均得点

項目	A	B	C	D	E	F
得点	3.7	3.7	3.6	3.4	2.0	1.4

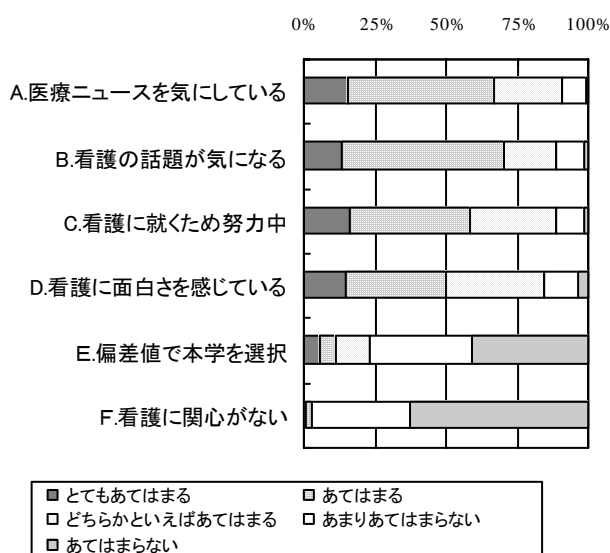


図 2 II 1 医療・看護に対する関心(n=117人)

『A. 医療関連ニュースを気にしている』についての得点は 3.7 であり、『B. 看護の話題が気になる』についての得点も 3.7 である。両者の肯定的意見はそれぞれ 91%と 89%であり、約 9 割の学生が医療・看護関係のニュースに関心を持ち、看護の話題も気にしていることがわかる。

『C. 看護職に就くための知識・技術の習得を努力している』についての得点は 3.6 であり、肯定的意見は 89%である。『D. 看護に対して、おもしろさを感じている』についての得点は 3.4 であり、肯定的意見は 84%である。『E. 看護師希望ではなく、偏差値で本学を選択した』についての肯定的意見は 2 割であり、否定的意見は 77%であった。従って入学動機として、約 2 割の学生は偏差値から本学科を選択している。同様の質問に関して河村<sup>6)</sup>は、看護師志望強度の調査結果から「どち

らともいえない」「あまりなりたくなかった」「絶対なりたくなかった」と回答した学生が 20%いることを報告し、土屋<sup>7)</sup>は 3 割強であることを述べている。これから考えると、看護師をしていなかったという意見が 23%であることは、特別な数値ではないと判断する。次に『F. 看護に関心がなく考えたくない』についての得点は 1.4 と低く、肯定的意見は 3%と非常に少ない。看護に対して関心を持っている学生が圧倒的に多いことになる。

以上 A~F の結果より、学生は医療・看護について約 9 割が興味や関心を持ち、看護職に就くための知識・技術の習得に努力している。看護におもしろさを感じている学生は 8.5 割と多い。入学時点において、看護師希望ではなく偏差値により選択した学生が約 23%存在するが、看護学生として専門科目を学び看護学実習を体験することにより、医療や看護について興味や関心を持ち、知識や技術を身につけようとしていることがわかる。

続いて〈2 看護職選択の現実性〉についての集計結果を表 4 および図 3 に示した。

表 4 医療・看護に対する関心についての平均得点

項目	A	B	C	D	E	F
得点	3.1	4.0	3.9	1.9	3.3	2.7

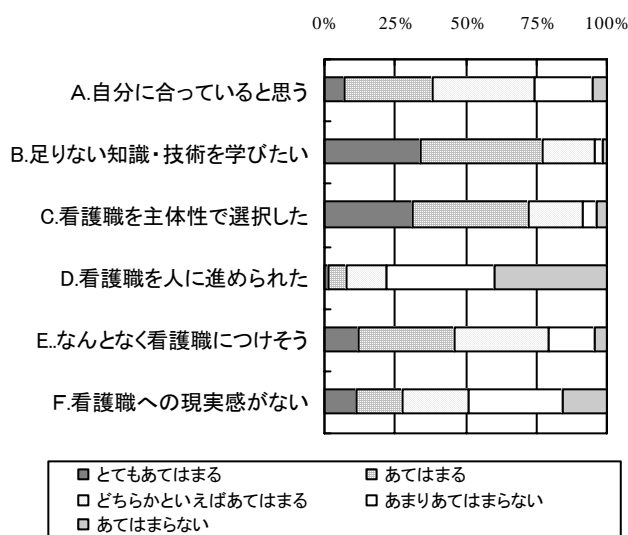


図 3 II 2 看護職に就くことの現実性(n=118人)

『A. 看護職は自分にあっていると思う』についての得点は 3.1 である。肯定的意見は 75%、否定的意見は 25%であるから、2.5 割の学生は看護職が自分に適した職業であると捉えていないことがわかる。『B. 看護職に就くために必要な知識や技術をもっと学びたい』

についての得点は4.0とA～Fのうちで最も高く、「とてもあてはまる」34%、「あてはまる」43%であった。これを合わせると約8割が看護職のための知識や技術を学ぼうとし、「とてもあてはまる」という強い姿勢を示している。Aで看護職が自分に合わないと感じた学生も学ぶ姿勢を示していることがわかる。この学習意欲の高さは、専門職を志向する学生として評価できる点であり、学校側が教育内容を充実させることにより、より学生が成長することが予測される。

『C. 看護職を自分の主体性で選んだ』についての得点は3.9であり、「とてもあてはまる」が31%と多い。肯定的意見は約72%になり、看護職の選択は自分の主体性であることを明確に示している。『D. 人にすすめられたので看護職をやると思った』についての得点は1.9と低く、肯定的意見は22%と少ない。C, Dを考え合わせると、自分の職業選択に対する意志を尊重し、主体的に看護職を選択してきた集団といえる。『E. このまま大学で勉強していれば、看護職になんとか就けそう』についての得点は3.3であり、肯定的意見は80%、否定的意見は20%である。看護職に就けることの見通しを持っている学生は8割と多い一方、そうではない学生が2割いる。見通しを持っていない2割の学生は、さらに自己を高めなければ看護職に就けないと考える向上心によるものか、あるいは看護職に就けるかどうか不安のいずれかであろうと考える。

『F. 看護職に就くことの現実感がない』について、「とてもあてはまる」は11%、「あてはまる」は17%であり、合わせて28%が現実感を持っていないと回答している。全体を肯定的意見と否定的意見の二つに分けると、それぞれ51%と49%になり、半数は看護職に就くことに現実感を抱いているが、半数はそうでない学生がいることがわかる。

以上A～Fの結果により、自分が看護職に就くことについて7.5割が適していると判断し、約8割が主体的な判断に基づいて看護職を選択・決定してきたことがわかった。そして受け身の姿勢でいるのではなく、努力を重ね知識や技術を習得し、看護職に就くため自己を高める意欲を4.0という高得点が示している。しかし将来看護職に就くという現実感をもった学生の割合と現実感をもたない学生の割合がほぼ等しいことがわかった。これはおそらく、社会に出ていない立場であるため現実感が薄いのではないかとということと、看護職につくには、学ばなければならないことがまだまだあるという意識が強く、一人前の看護職にはとうてい及ばないと捉えていることの表われではないかと考える。

次に〈3 看護職への限定性〉に関する項目の集計結

果を表5および図4に示した。

表5 看護職への限定性平均得点

項目	A	B	C	D	E	F
得点	3.6	3.0	1.9	2.1	3.0	2.3

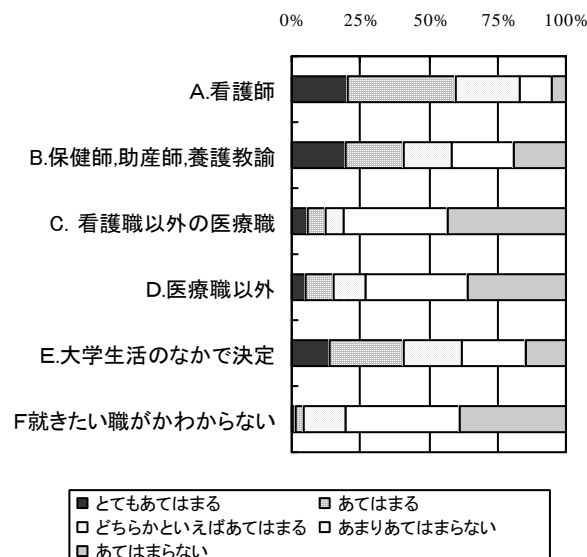


図4 II3 看護職への限定性 (n=118人)

『A. 看護師になりたい』についての得点は3.6であり、肯定的意見は83%、否定的意見は17%である。A～Fのうち肯定的意見の割合が最も多い。『看護師になりたいと思った時期』について記入している40人をみると、幼児期2人、小学校4人、中学校7人、高校19人、大学8人であり、進路決定の時期に当たる高校時代が最も多い。看護学科入学後に志向した学生は8人である。入学後の関わりが重要といえる。

『B. 保健師、助産師、養護教諭のいずれかになりたい』についての得点は3.0であり、看護師に次いで高い。肯定的意見と否定的意見に分けると、それぞれ58%、42%であり、看護職の中でも6割近くが保健師、助産師、養護教諭になりたいと考えている。『そう思った時期』について記入している49人をみると、中学校7人、高校14人、大学24人であり、大学での決心が最も多い。これは、学年進行とともに看護の専門職の多様性を学ぶなかで看護師以外の専門職を知り、保健師、助産師、養護教諭を志向したためであろう。

『C. 看護職以外の医療職(例：医師、薬剤師等)になりたい』についての得点は、1.9と低く、肯定的意見は19%、否定的意見は81%であった。看護職に限定して志向していることがわかる。

『D. 医療職以外になりたい職業がある』についての得点は2.1であり、肯定的意見は28%であり、否定的意見は82%である。約7割が医療職に限定し、医療職

以外に対して否定的意見であるが、中には料理関係など他の職業に就きたいと考えている学生が存在していることがわかった。

『E. 将来どんな職業につくかは大学生活を送りながら決定していくつもりである』についての得点は 3.0 であり、肯定的意見は 62%、否定的意見は 38%である。否定的意見が多い学年をみたところ、1 年生と 4 年生であった。理由として考えられるのは、1 年生は入学してから日も浅く、看護職を広い意味で捉えてはいるものの具体的でないことと、4 年生はすでに就職を決定している時期であり、この質問は妥当ではないと推測される。1 年生に看護職のイメージがあまり具体的でないことについては、後述の『Ⅲ. 理想の看護師像』で詳述する。

『F. 自分がどんな職業につきたいかわからない』について、肯定的意見は 19%と少なく、81%は自分が将来就きたいと希望している職業が明確であると答えている。

以上 A～F の結果より、本調査の看護学生は、自分が将来就きたい職業について約 8 割は明確な考えを持ち、それは医療職の中でも看護職に限定されていた。また、看護職に就きたいと思った時期は、回答のあった 49 人をみると、進路を決定する「中学～高校時代」に 21 人、「大学入学後」に 24 人と、二つに大別される。大学入学後の関わりが重要といえる。

次に、＜4 看護職の選択理由＞に関する項目の集計結果を表 6 および図 5 に示した。

表 6 看護職の選択理由についての平均得点

項目	A	B	C	D	E	F
得点	3.7	3.9	3.8	3.6	3.9	3.1

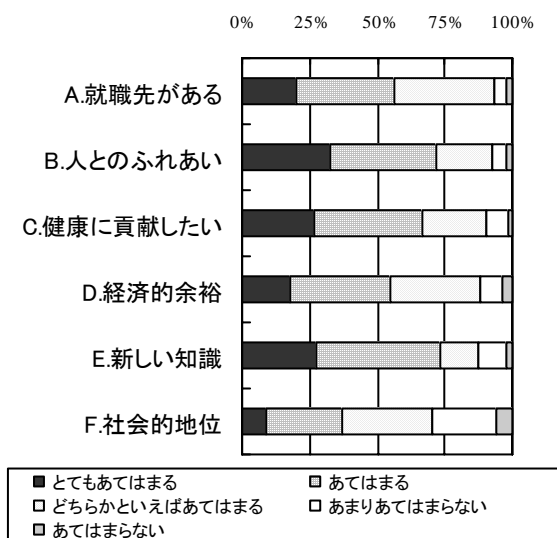


図 5 II 4 看護職の選択理由(n=117 人)

得点の高い順に並べると、1 位は『A. 人とのふれあいを得たい』『E. 新しい知識を得たい』がどちらも得点は 3.9 であり、3 位は『C. 人々の健康に貢献したい』が 3.8 で、4 位以下は『A. 就職口がある』『D. 経済的余裕を得たい』『F. 社会的地位を得たい』であった。図 5 が示すように、得点の最も高い『人とのふれあいを得たい』と、得点の最も低い『F. 社会的地位を得たい』を除き、A, C, D, E の肯定的意見の割合に大きな違いはない。

以上の結果、看護師を選択する理由の上位 3 位は、「人とのふれあいを得たい」「新しい知識を得たい」「人々の健康に貢献したい」であった。そして「就職口がある」「経済的余裕を得たい」という理由を看護職の選択理由にあげた学生もそれぞれ約 9 割いる。I A・I B の回答にみたように、就職することは価値が大きいと捉えている学生は 9.5 割であることと経済的不況からの雇用率の低さから考え、就職先があることや経済的余裕に魅力を感じている学生が多くいることは不思議ではない。社会的地位の得点が最も低く 3.1 であったことは、看護職の社会的地位は魅力がなく低いものと捉えていることによるものか、社会的地位そのものを職業選択理由としてあまり重要視しないとするものの両方が考えられる。しかし看護職の選択理由の上位に「人々とのふれあい」という看護職の特性や、「新しい知識を得たい」という常に自己研鑽が必要である点や「人々の健康に貢献」という社会的役割に肯定的であることから、看護職の社会的地位を魅力のない低いものと捉えているとは考えにくい。

以上 I～II をまとめると、I 職業選択・決定については、約 9.5 割の学生が人生において価値が大きいものであり、納得のいく判断をしようと考えていた。II 〈1 医療・看護職についての関心〉については、約 9 割が興味・関心を持ち、8.5 割が看護におもしろさを感じていた。入学時に看護師希望ではなく偏差値で選択した学生が約 2 割いるが、医療や看護について関心を持ち、知識・技術を身につける努力をしている。〈2 看護職選択の現実性〉は、7.5 割が看護職は自分に適していると判断し、約 2 割はそうではなかった。選択したのは自らの主体性であり、受け身ではない。また知識・技術を学びたい意欲が高く、看護職が適していないと捉えている学生も学ぶ意欲を持っている。〈3 看護職への限定性〉は 8 割が看護職志向で、保健師、助産師、養護教諭志望は 6 割であった。看護職以外の医療職志向は 2 割弱であり、看護職に限定している学生がほとんどであった。〈4 看護職の選択理由〉については、上位 3 位は「人々とのふれあいを得たい」「新しい知識を得たい」「人々の健康に貢献したい」であった。これは看護の社会的役割を評価しているものと判断す

る。

全体として、看護師希望でなく偏差値で看護系大学への入学を決定した学生や看護職が自分に合っていないと捉えている学生が2~2.5割前後存在するが、全体として医療・看護への関心が高く、約8割がもっと知識・技術を学びたいとして、学習意欲が高い。入学後4年間の学習体験のなかで、看護職を志向するようになり、専門の学習への意欲が高まることから、大学側がいかにかそれらに計画的、効果的に関わるかということの重要性が示唆される結果となった。

### Ⅲ 理想の看護師像について

#### 『理想の看護師像』の記述内容

理想の看護師像を記述している学生は91人であり、学年ごとの内訳をみると、1年生17人、2年生14人、3年生29人、4年生31人であった。記述内容を文節ごとにまとめると、エピソードの記述数は251文であり、1年生34文(13.5%)、2年生39文(15.5%)、3年生88文(35%)、4年生90文(36%)であった。学年別にみて3・4年生の記述者数・記述内容が多く、1・2年生のほとんどが理想の看護師像を描けないことが分かる。この背景には、1年生は入学まもない時期であること、2年生は、生活援助に関する単元は履修しているが、看護学実習としては医療施設の見学実習を終えた段階であり、自分たちが目指している職種に対してまだ漠然としたイメージしか持っていないことが推察される<sup>8)</sup>。従って理想の看護師像を描けるかどうかとういことが、専門職者としての職業準備性を整える1つの指標となるのではないかと考えた。よってここでは、『理想の看護師像』について自由記載された91人を対象に、KJ法に準拠した方法で解析した。その結果、251文を類似しているエピソード同士でまとめると101エピソードに分類された。なおこの際、どのエピソードにも属さない分類不能な文が、43文あり、これらは対象外とした。更に101エピソードを質的類似性によりまとめると、25下位要素、7上位要素に分類でき、最終的に1)人としての資質、2)専門職者としての資質、3)豊かな人間性と自己成長の3ユニットにまとめられた。

次に学年ごとに『理想の看護師像』から得られたエピソードを空間配置し、4年間の職業準備性を「いつ」の時期に、「何が」変化したかをみた。

#### 1. 人としての資質

このユニットは、人とかわる上で人としての臨む態度を示し、「優しい」「親しみやすい」「明るい」「行動力がある」の4要素が含まれている(以下:「」を要素、<>をエピソードと記述する)。

このユニットに関連した要素とエピソードの数と記述内容は、表7の通りである。

表7 人としての資質 n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
優しい	優しい	1	5	3	1
	思いやりがある優しさ		1		2
	厳しい優しさ			1	
	穏やか。				1
	意志の強い優しい人。				1
親しみやすい	親しみやすい	1	1	1	
	好かれる	1	1		
	フレンドリー		1		
	距離感を感じさせない	1		1	
	話しかけやすい			1	
明るい	ユーモアある			1	
	楽しく話している			1	
	明るい	2			1
	ハキハキしている。	1			
	笑顔	1	2	4	5
行動力がある	生き生き	1			
	生き甲斐を感じている	1			
	てきぱき仕事ができる	1		1	
	キビキビ仕事のできる	1			
	疲れを見せない人	1			
	良く気がつく	1			
	感情に左右されない		1		1
細かなことにこだわらない		1			
時間をうまくやりくりする				2	
合計		14	13	16	12

本調査の看護学生は、「優しい」「親しみやすい」「明るい」といった人としての資質を、どの学年も大切と捉えていた。そして表7にみるように1年次では、看護師の行動力を<てきぱき><キビキビ>とした視覚的行動として捉えていたが、3・4年次にはその数は減少し、専門職としての資質(表8・表9)である具体的行動内容の要素が増えてきている。このことは、看護師の行動を抽象から具体へ変化させていると考えられるのではないかと推察される。また看護学原論・看護理論・専門教育科目を学ぶなかで、人としての資質を他者と関わるときに必要不可欠なありようと捉え、看護の基盤にしていると考えられる。特に4年次には、優しさの中にも、<思いやりがある優しさ><厳しい優しさ><意志の強い優しい人>と表現し、患者様と接する状況に応じた優しさの意味を理解してきていると考える。従って学生は、4年間を通して人の資質を看護職としてのありように置きかえて、より抽象的イメージから看護職としてのより具体的イメージへと変化させていると推察される。これらのことより看護学生が専門職者としての特性を理解する段階といえるのではないかと推察される。

2. 専門職としての資質

このユニットは、1)専門職者としての知識・技術・判断・質のよいケア、2)細やかなケア、3)家族・他職種との連携、4)安寧の4上位要素が含まれている。専門職者としての知識・技術・判断・質のよいケア(表8)には「知識がある」「技術がある」「観察力がある」「思考力がある」「判断力がある」「科学的ケアができる」の6下位要素であった。細やかなケア(表9)には「個別的ケア」「自立へのケア」「具体的ケア」の3下位要素であった。家族・他職種との連携(表10)には、「チームで支える」「家族を視野に入れる」の2下位要素であった。安寧(表11)には、「信頼される」「安心できる」「寄り添う」「親身になる」の4下位要素であった。このユニットに関連した要素とエピソードの数と記述内容は、表8~11の通りである。

表8 専門職者としての知識・技術・判断・質のよいケア n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
知識がある	幅広い知識	2		2	1
	正しい知識		1	3	3
	最良の看護を行える知識		1		1
	専門知識			1	
	医学的知識				1
技術がある	技術	1		1	1
	優れたケアの技術		1	3	3
	専門性の高い技術				2
	ニーズに答えられる技術				2
観察力がある	客観的な観察力		1	1	
	注意力がある			1	
	広い視野をもつ			1	
	小さな可能性も見逃さない			1	
思考力がある	もの事を理論的に考える				1
	統合的なアセスメント能力				1
	看護過程を展開する能力			1	
判断力がある	判断力	1	1	1	
	臨機応変に対応できる			2	
	機械的に判断しない			1	
科学的ケアができる	医療的知識から科学的看護		1		
	キュアだけでなくケアもできる			1	
	エビデンスに基づいたケア				4
	目的を明確にした意図的ケア				1
合計		4	6	20	21

表9 細やかなケア n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
個別的ケア	1人1人にあった看護	1	1		
	よりよいケア		1	1	
	主体的に看護を展開する			1	
	個性を生かすケア				1
	最優先とするサービス				1
自立へのケア	自立を助けられるケア		1		
	元の生活に早く戻れるケア			1	
	ベッドサイド環境を整える			1	
具体的ケア	指導するのが上手				1
	ベッドサイドに行く時間が多い		1	1	
	合計	1	3	5	4

表10 家族・他職種との連携 n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
チームで支える	患者と医療者の橋渡し役割	1			
	他職種とコミュニケーションを大事にする		1		
	他職種間で連携をとる				2
	職種間に自分の意見を伝える				1
家族を視野	患者家族を中心とする				1
	患者様・家族に向き合う				1
合計		1	1	0	5

表11 安寧 n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
信頼される	患者・他職種から信頼される	1		1	
	患者から信頼される		2		3
	患者様の頼りになる存在			1	3
	信頼のおける人間性			1	
安心できる	患者様に安心感を与える	1		1	1
	患者・家族に安心感を与える			1	
	患者様の心を理解			1	2
	患者様の思いをくみとる			2	
	状態にいつも目を配れる				1
寄り添う	患者様の心の支えになる		1		
	患者様の心のケア		1	1	1
	患者・家族の思いを察した配慮			1	
	患者様の気持ちを察する			1	1
	患者様の心に寄り添う				1
親身になる	自分事を真剣に考えてくれる			1	
	なんでも相談に乗ってくれる			1	
	親身になって接する				2
合計		4	2	13	15

1年次では、人としての資質を視覚的行動として捉えていたが、表8にみるように、3・4年次には専門職者としての資質である、看護職としての「知識がある」「技術がある」「観察力がある」「思考力がある」「判断力がある」「科学的ケアができる」などと具体的現象から、看護職として必要な専門的能力として表現されている。これは看護の方法を学ぶ中で獲得されてきたものであり、表8~表9からも分かるように、学年が進むにつれ、より具体的に専門職者としての行動がイメージでき、専門職者に必要な能力として捉えていると考えられる。4年次には、「正しい知識」「優れたケアの技術」「エビデンスに基づくケア」が患者様の安全を守り、安寧を与え、より個別な細やかなケアが行えることを、看護学実習を通して学んでいるのではないかと。更に患者様を、家族をも含めた医療チームで支えることの意味を理解し、医療チームの一員としての自己の位置づけが明らかになり、組織に所属する準備性が整い始めている前段階といえるのではないかと。また、専門教育科目・看護学実習を通して専門職者としての、「知識・技術・判断・質のよいケア」「細やかなケア」「他職種との連携」「安寧」といった、看護職として必要な細やかな資質が考えられるようになり、看護職と

しての思考が分岐してきていることが推察される。従ってこれらのことより、看護の専門的知識を習得し、看護の方法を理解する段階といえるのではないか。

### 3. 豊かな人間性と自己成長

このユニットは、1)他者への尊重、2)看護職としての資質の2上位要素が含まれている。他者への尊重(表12)には、患者様と「関わる姿勢」「向き合う姿勢」「受け止める姿勢」の3下位要素であった。看護職としての資質(表13)には、看護職として「成長し続ける」「誇りを持つ」「豊かな感性」の3下位要素であった。このユニットに関連した要素とエピソードの数と記述内容は、表12～13の通りである。

表12 他者への尊敬 n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
関わる姿勢	丁寧な話し方	2	1		1
	温かい			1	
	人の痛みがわかる			2	
向き合う姿勢	患者に対して共感的		2		3
	人と人、1対1で向きあう		1		
受け止める姿勢	話を良く聴いてくれる			5	1
	話を聴きしっかりと受け止める			1	1
	傾聴				2
合計		2	4	9	8

表13 看護職としての資質 n=91(人)

要素	エピソード	1年	2年	3年	4年
成長し続ける	自分に満足せず勉強する	1			
	自分に満足せず成長し続ける	1			
	日々新しい知識を得る		1		3
	向上心がある				2
	自己を高める				2
誇りを持つ	看護について自分の考え持つ		1	1	
	仕事に責任を持つ			4	1
	仕事に誇りを持つ			1	
	看護にやり甲斐を感じる			2	
豊かな感性	人間性が豊か				2
	感受性が豊か				1
	気づける感性を持つ				1
	人間性と理性を合わせ持つ				1
合計		2	2	8	13

専門職者としての特性を理解する段階、看護の専門的知識を習得し、看護の方法を理解する段階を経て、看護学生たちは、看護職としての職業準備性が整ってくる段階に至るのではないか。看護学実習を通し、実際に患者様にケアする中で、多様な看護の視点に気づかせてくれる他者との出会いのなかで、「他者への尊敬」を尊び、自己と他者の違いを知ること、専門職者としての他者と「関わる姿勢」「向き合う姿勢」、他者を「受け止める姿勢」を学んでいると考える。また、学年が進むにつれて、生涯を通して学び続ける、

積極的に取り組む必要を感じ、適切なケアを行うためには、満足せず「勉強する」「成長し続ける」ことから「日々新しい知識を得る」「向上心がある」「自己を高める」といった、自己成長から専門的な自己研鑽を積むことに重きを置き、看護職として日々成長しつづける自己の姿がイメージできてきたと考えられる。

次に看護職としての資質に、3年次には、「仕事に責任を持つ」「仕事に誇りを持つ」「看護にやり甲斐を感じる」といった、看護の専門職者としての自意識が高まってきているといえる。これは、3年次が職業的責任を強く感じ始める時期であることを示すのかもしれない。

4年次になると、看護職としての資質に「豊かな感性」をあげていることが特徴といえる。このことは、看護学生が看護学実習で出会う多くの看護師と自己のあるべき姿を重ねることで、看護職として「人間性が豊か」「感受性が豊か」「気づける感性」が資質として重視される職業であることを認識し始めている時期なのかもしれない。従ってこれらのことより、4年次は、これらから理想の看護職としてあるべき自己の姿を明確化する段階といえるのではないか。

続いて理想の看護師像に対する影響因子と合わせて考える。理想の看護師像の形成に影響を与えた因子についての集計結果を図6に示した。

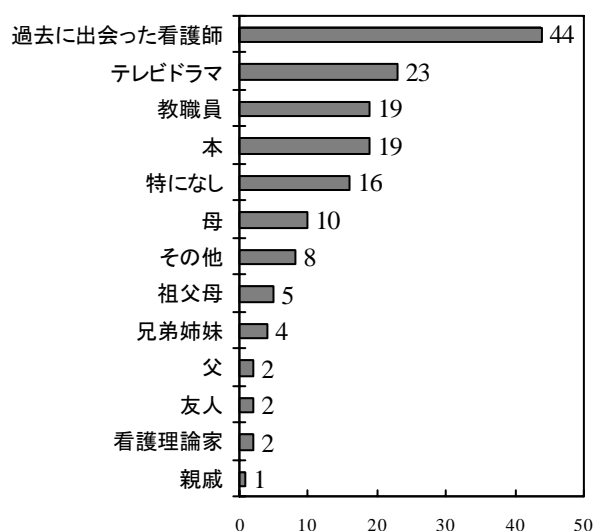


図6 理想の看護師像への影響因子 (人)  
(複数回答:n=91人)

理想の看護師像を記述していた91人の回答のうち、上位5位の回答は「過去に出会った看護師」44人、次いで「テレビドラマ」23人、「教職員」並びに「本」19人、「特になし」16人の順であった。これらのことより、過去に自分や家族が病気を患った際に出会った看護師、また



は実習で出会った看護師に最も多くの影響を受けていることがわかる<sup>9)</sup>。実際に出会った心ひかれる看護師・教職員は、あの人のようになりたいという憧れの存在であるとも考えられ、将来の看護職としてあるべき自己の姿をより明確化する理想の姿といえるのではないか。また自分(家族)が苦しい時、看護師の援助を受け心が癒されるという体験が、看護学生の理想の看護師像に影響を与え、患者(家族)の身体のみならず心のケア> (表 5) ができる看護師を理想として描くようになったのではないと思われる。他の影響因子をみると、テレビドラマや本等のマス・メディアからも影響を受けていることがわかる。医療現場を扱うテレビ番組は多く、そこに登場する看護師はいつも明るく表情が豊かで楽しそうに働いており、周囲の医療スタッフや患者様とともに経験を重ね成長していく。こういった看護師の姿から学生達は大きな影響を受けていると推察される。

以上の結果より、本研究の看護学生は、『理想の看護師像』の記述内容から、視覚的に捉えていた看護師の行動特性をより具体的に捉え直し、看護師の資質を具体的現象から本質へと記述し、『理想の看護師像』をより明確にしていた。これらのことより『理想の看護師像』を明確化することで、看護職としての職業準備性を段階的に発展させているといえるのではないか。それらは必ずしも一直線に進むものではないが、看護の専門的知識を学ぶにつれ、専門職者としての資質をより具体的に示し、専門職者として必要な知識・技術だけでなく患者様への安寧と他者への尊敬を価値として捉え、目指すべき理想の看護職としての姿をより明確化し、専門職者としての役割意識を高めていると考えられる。そう考えると理想の看護師像を描けるか否かは、教育内容・方法によって大きく影響されることを示唆しているといえる。逆に教育内容・方法から教育効果を推測することが可能と考えるならば、専門職看護師養成教育型<sup>10)</sup>といわれる今日、学校単位での個性ある教育が期待されているだけに、より豊かな教育内容・方法を工夫・創造することが求められていると考える。

## 結論

四年制大学における看護学生が、看護職の適性や職業準備性をどのように考えているのか明らかにするために質問紙調査を行った。その結果、約 8 割が主体的に看護職を志向し進路を取ってきたことがわかった。さらに在学中は就職に対し真摯な姿勢を持ち、約 9 割は、人々とのふれあい、新しい知識、健康への貢献を看護職の魅力と感じており、約 2.5 割存在した自分が看護職に適していると思っていない学生も、自分に不

足している知識や技術といった部分は補おうと努力していることが明確化された。

『理想の看護師像』からは、1) 専門職者としての特性を理解する段階、2) 看護の専門的知識を習得し、看護の方法を理解する段階、3) 理想の看護職としてあるべき自己の姿を明確化する段階の 3 つのプロセスが伺い知れた。この 3 つの段階をおって学生の職業準備性が整えられると考えるならば、看護の基礎教育を通して教えられてきた価値観、規範、そして行動様式が最も身に付きやすい<sup>11)</sup>学生時代の 4 年間で看護職への関心、限定性、現実性、主体性をどのように高めるのが看護教育の課題であり、学生が目指す『理想の看護師像』をより具体的に描けるような教育方法やより創造的な授業を今後模索していく必要があると考える。

## 引用文献

- 1) 文部科学省: 学校基本調査速報, 卒業後の状況調査, 2004-12. 7. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/04073001/006.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04073001/006.htm)
- 2) 後藤宗理: フリーター減少の心理的社会的意味, 現代のエスプリ, 427, 5-18, 2002.
- 3) 日本看護系大学協議会データベース委員会: 看護系大学の教育等に関するデータベース 199~2001 年度, 33, 日本看護系大学協議会, 2002.
- 4) 掘洋道著: 心理尺度ファイル, 480-488, 垣内出版, 東京, 1999.
- 5) 統計数理研究所国民性調査委員会: 第 5 日本人の国民性 戦後昭和期総集, 出先書店, 東京, 1992.
- 6) 河村彰美, 中川雅子, 藤田淳子, 種池礼子, : 看護学生における看護婦のアイデンティティの経営と志望理由・学習進度との関係, 京都府立医科大学医療短期大学部紀要, 10, 91-99, 2000.
- 7) 土屋三千代他: 看護婦のキャリア形成過程に関する研究(1), 成田赤十字看護専門学校, 8-9, 1985.
- 8) 村田節子, 長家智子: 医療人を目指す学生の職業イメージに関する予備的調査, 九州大学医療技術短大部紀要, 27, 15-20, 2000.
- 9) 小山田信子, 塩飽仁他: 高校生を対象にした看護のイメージ調査, 東北大学医療技術短期大学部紀要 3(2), 131-138, 1994.
- 10) 杉森みどり・舟島なをみ: 看護教育学 第 5 版, 医学書院, 東京, 205-209, 2004.
- 11) Lum J L J: Reference Groups and Professional Socialization. (In) Hardy, M. Conway, ME., (Ed.). *Role Theory: Perspectives for Health Professionals*. Norwalk Connecticut: APPLETON-CENTURY-CROFTS, 137-156, 1978.